

米に学ぶ 沖縄のため

沖縄が1972年に本土に復帰してから15日で45年を迎えた。全国の米軍基地の大半が沖縄県に集中する構図は、戦後を通じて変わらないまま。

米軍統治の苦しみと、米国の近さから得るものとの間で、沖縄は常に「是非々々」を迫られてきた。沖縄の医療のため、米國と向き合ってきた74歳の医師もその一人だ。

「米国の医療は世界をリードしていた。全てを敵視するのではなく、一部は受け入れ、成長しよう」と踏ん張ってきたのが沖繩だ。沖縄県立中部病院(うるま市)で米國の大学の研修プログラムに取り組む安次嶺(あしむね)馨さんは、米國での経験を生かし、県内の医療の進化に奔走してきた。

本土復帰45年 医療復興へ留学 74歳医師



太平洋戦争で国内唯一、苛烈な地上戦が繰り返されたのは20万人を超す。県民の4人に1人が犠牲となり、戦後は深刻な医師不足に悩まされた。終戦翌年の46年当時、医療を必要とする人は数え切れないのに、県内に医師は64人しかいなかった。安次嶺さんが医師を目指した原点だった。

中部病院で研修した学生の写真の前に立つ安次嶺さん

安次嶺さんは高校卒業後、「琉球」と書かれたパスポートで本土の大学に留学した。日本政府は米軍統治下の沖縄の学生を選抜して留学させる制度を設けていた。

葛藤向き合い奔走

だが当時は学生運動のうねりが盛り上がりつつしているさなか、勉強しようと思えばいくらでもできる環境にあるのに政治活動に明け暮れる学生

たちの中、安次嶺さんは「ろくな勉強ができなかった」。嫌気がさし、故郷へ帰る決断をした。

沖縄に戻った安次嶺さんが見たものは、最先端の米國式の医療だった。

「専門科ごとに分け隔てせず、とにかくどんな症状も幅広く診断する。まさに沖縄に一番必要な医療スタイルだった」と衝撃を受けた。

米國側も本国から医師を呼び寄せて沖縄各地に配置した。67年にはハワイ大から中部病院に指導医を送り、医療の拠点として整備するための研修

制度を始めるなど、沖縄の医師不足解消に向けた取り組みを進めていた。安次嶺さんは小児科医として、本土復帰直前の71年に渡米した。「とに

かく沖縄に先進医療を持ち帰るんだと、ひたすらトレーニングを積んだ」。故郷は留学中に本土復帰を果たし、安次嶺さんも米國の先端知識を身につけ帰国した。

「基地問題をはじめ、負の要素は多い。一方で医療では全国をリードしている」。安次嶺さんは今後も米國式医療を取り入れた研修を続け、後進を育成していくつもりだ。正と負の両面に向き合わざるを得ない葛藤を抱えながら、多くの沖縄県民が基地と隣り合わせの日々を送る。

適切な治療を受けたくても受けられない人がいないようにする。安次嶺さんが米國で学んだ医師としてのモットーだ。こうした考え方に基づき、中部病院は救急患者の受け入れを一切断らず、県内随一の病院となった。安次嶺さんは「米軍の占領下にあったからこそ、今の中部病院がある」と考えている。

本土復帰前に米國が始めた中部病院での研修制